

自分の身の丈に歴史を合致させるのではなく……、
 自分を歴史の中で空前の大激動期となった、幕末維
 新期の色とにおいと雰囲気の中に慣れさせていくこと。
 私はその最良質テキストの一つが、この『維新日乗
 纂輯』だと信じている。
 (宮地正人・本書推薦文より)

維新日乗纂輯

全五卷

日本史籍協會叢書

限定二百部復刻



『維新日乗纂輯』の勧め

歴史学者 宮地正人

マツノ書店が日本史籍協会編『維新日乗纂輯』全五巻の復刻を考えていると聞き、喜んで推薦文を書くことを承諾した。なによりもまず、推薦者自身がこの『維新日乗纂輯』からこれまでに多大の学恩、アイデア、そして発想を得てき続けてきたからである。

現在も各自自治体史まで幕末維新时期史料の翻刻がなされているとはいえ、基本的に第一級の史料の調査、発掘、翻刻は、維新史料編纂会という国家的な事業主体のもと、文部省維新史料編纂事務局により事業完成の期限が切られていることもあり、全力を挙げておこなわれた。敗戦までは各華族家では当該期の原史料を保有し、多くの家が家史を編纂しており、史料情報は今日に比べようがないほど豊かだった。編纂会の威光をバックに、事務局とその周辺の編纂関係者は、良質の史料を次々と日本史籍協会叢書の中で翻刻していった。私達が当然のこととして利用している『大久保利通日記』や『木戸孝允日記』、そして幕末政局史では最重要の中根雪江編『昨夢記事』以下の連続する松平慶永関係史料などが、この過程で活字化されていったのである。史籍協会叢書の同人達は、広く史料を調べ、何が幕末維新史研究の上で必要となるかを、当時としては最もよく理解していた人々であった。史料を解読し、じっくりと時間をかけて論文に仕立てることは、期限にしばられ極めて困難なことだったことも、逆に翻刻・出版への意欲を高めていったと私は推測している。他方で当該時期の幕末維新史料集要求もまた、今日とは比較にならないほど強烈なものであった。

この博搜され、厳選される中で、活字化したいが一冊には分量不足という性格の良質史料が纏められたのが、この五巻の『維新日乗纂輯』となったのである。その中に、既に『安達清風日記』として刊行されていた残部も『安達清風日記(補遺)』として本書に組み込まれた。残部といっても重要度において劣るものではなく無い内容をそれは持っている。

幕末維新史研究は、幕府、朝廷、各藩の研究をそれぞれ積み重ね、それを総和すれば政治過程が明らかになる、といったものでは決していない。むしろその逆が正解なのであり、複雑な相互関係を常に全体的に把握する志向と努力の中から次第に明らかになってくるものである。藤田省三は名著『維新の精神』の中で、維新をもたらししたのは「百論沸騰」、「処士横議」、「浪士横行」そして「志士」の横断的連結にあると喝破している。

事態を相互関係の中でとらえさせ、また結果論や常識論で片づけず、その瞬間の「真实性」から人と歴史をとらえさせるものとしては、私は『維新日乗纂輯』はこの叢書の中で随一の史料集だと思っている。収録された良質史料の多角性がそのことを可能にしている。安政七年三月三日の桜田門外の変は、常識的には当日のみの事件で済まされるが、そのプランには薩藩有志集団の脱藩上京が組み込まれていたのであり、「一国の定論未だ纏まらず、之を纏めて人数を繰出すに至るまで惨殺の期を延ばさん事を求」める田中謙助が、延期不能との水戸側主張を呑み、昼夜兼行で西下、二月十七日、下関の豪商白石正一郎宅に着、白石は「江戸の密策承る。路費不足の趣に付、之を弁」(白石正一郎日記)じ、「大急帰国」のため対岸の大里迄船を仕立てさせている。二月二十一日帰藩して同志に告ぐるも結集出来ず、水戸への約束を果たし得なかつた慚愧の念が、田中をして突出組の急先鋒たらしめ、寺田屋で上意討に遭わせることになったのである。白石の資金援助と同じ性格のことが、「千屋菊次郎日記」の文久二年十一月の条にある。尊攘志士のパトロンで豪商・文人の板倉槐堂から百両を得ているのである。志士の活動資金出処への留意無しに維新史を論じることは出来ない。

この寺田屋事件の前提となった島津久光の率兵上京の件にしる、薩藩だけの動きで論じるの

ではなく、内勅も無しこの計画が西国にどのように受けとられていたかの確認が重要となる。「樋口真吉日記」(遣倦録) 文久元年十一月条には、早くも「島津氏三万を率いて上京の説あり」と記され、「久坂玄瑞日記」文久二年二月二十五日の処には、北条瀬兵衛の「薩州此度京師にて一発する様子、如何なる事ぞ。天子を擁するか所司代を襲うか」との発言が記録されている。パンドラの蓋があげられ、自重論者だった西郷隆盛自身が下関で事態の急激な展開に驚愕することとなる。

このように例示していくと際限がなくなってしまう。自分が今日的常識に従い主観的に設定した課題に合うだけの史料を読むだけでは、その狭い枠組にとどまった、結論が当初から見えている論文にしかない。自分の身の丈に歴史を合致させるのではなく、自分を日本の歴史の中で空前の大激動期となった幕末維新期の色とにおいと雰囲気の中に慣れさせていくこと、今日とは全く異質の世界を知る一見迂遠のように思えるこの作業が、歴史を学ぼうとする者にとってどうしても必要となってくる。私はその最良質テキストの一つがこの『維新日乗纂輯』だと感じている。

幕末期鳥取藩京都留守居役として活躍し、慶応二年八月に帰国、藩首脳の因循姑息に絶望して辞職した安達清一郎は明治二年一月、横井小楠の暗殺の報を得て「春初第一番の大快事」と書き、明治四年一月の広沢真臣暗殺を「天罰云云」と記し、七月の廃藩置県を「頓に暴断、諸藩廢藩の命下ると云。諸藩定て藩論沸騰有るべし。嗚呼英雄有為の秋なれども要路無人」と日記に感慨を吐露している。

このような旧各藩の活動家が各地に存在する中で、廢藩断行旧四藩連合の面々が、いかに舵をとろうとしたのか、その緊迫感の所在を教えてください、本『維新日乗纂輯』の魅力の一つなのである。

『維新日乗纂輯』目次

第一卷

- 白石正一郎日記(安政五・一・十五〜明治十一・一・十七)
- 黒澤寛蔵覚書(安政五・八・八〜万延元・三・二十三)
- 遣倦録 樋口真吉日記(愚菴筆記)(文久元・九・三〜慶応三・二・二十六)
- 福岡孝弟 壬戌事(文久元・六月〜文久二・十・十五)
- 千屋栄再遊筆記(文久二・閏八・三〜文久三・三・二十四)
- 正親町三条実愛 御評議箇條(文久三・九・八〜慶応二・一・十六)
- 三条西季知筆記(文久三・八・十八〜慶応三・十二・十九)
- 南部寛男 七生日記(元治元・六・八〜七・十六)
- 江月斎久坂玄瑞日乗(文久二・一・一〜三・十八/元治元・六・二十七〜六・二十八)
- 付：品川弥二郎筆跡・山県狂介筆痕

第二卷

真木直人日記

- 天王山義孝日記(元治元・六・十五〜七・十九)
- 忠勇隊日記(元治元・八・五〜八・十四)
- 使長筑日記(慶応元・一・二十一〜二・十一)
- 小倉行記(慶応二・十二・二十一〜十二・二十四)
- 長幕戦争記事(慶応二・六・六〜八・一)
- 日知録(慶応元・一・十四〜明治二・四・十六)
- 中山忠能手記(慶応元〜明治元 断片)
- 有馬新七 都日記(安政五・八・二十九〜十二・十五)
- 但馬義孝実記 小山六郎覚書(文久三・三月〜十一月)
- 正親町公董旅中日記(文久三・六・十四〜十二)
- 加藤任重漫録 損菴漫録(文久三・三・二十七〜七・十三)
- 宮部鼎蔵・水野丹後手記

- 宮部鼎蔵 南海日録(文久三・八・十八〜元治元・五・二十五)
- 水野丹後 水野溪雲齋在西手記(元治元・十一・二十九〜慶応二・二月)
- 水野丹後 幕吏小林甚六郎来幸日記(慶応二・三・十九〜十二・二十二)
- 品川弥二郎日記(慶応二・六・十九〜慶応三・三・二十九)
- 遊免廻又夢(慶応二・二・十九〜慶応三・九・八)
- 旅路ノ夢(慶応二・五・一〜九・三)

第三卷

- 松平慶永 安政記事稿本(安政三〜安政五)
- 永田重三筆記(万延元)
- 美玉三平経歴日誌 溪間日乗(文久三・八・十六〜九・十三)
- 伴林光平 南山踏雲録(文久三・八・十五〜十・十二)
- 半田成久 大和戦争日記(文久三・八・十四〜九・二十七)
- 酒泉直滯京日記(文久三・七・二十一〜慶応三・十五)
- 秦林親日記(安政五・五・十〜明治十八 六月)
- 妻木頼矩手記 戊辰正月大坂城引渡始末(明治元・一・七〜一・七)
- 大鳥圭介獄中日記(明治一・六・三十〜明治三・七・二十九)
- 寺村左膳手記(慶応三・五・九〜十二・十九)

第四卷

- 小野権之丞日記
- 文久三癸亥年日記(文久三・一・二〜二・三十)
- 元治元甲子年日記(元治元・十一・十五〜十二・二十八)
- 慶応元乙丑年日記(慶応元・一・一〜一・十七)
- 明治元戊辰年日記(明治元・六・十八〜十一・八)
- 明治二己巳年日記(明治二・二・二十三〜十二・三十)
- 伊藤和義日記
- 文久三年日記(文久三・五・十一〜十二・二十四)

- 登都道中日記(文久三・九・二十八〜十・十三)
- 萩行日録(文久三・十一・七〜十二・二)
- 元治元年日記(元治元・一・一〜六・五)
- 日記残闕(文久三・十一・八〜元治元・五・六)
- 酒井孫八郎日記

- 明治元戊辰歳(明治元・一・一〜十二・二十九)
- 明治二己巳年(明治二・一・一〜八・二十七)
- 安達清風日記(補遺)

第五卷

- 慶応二丙寅日記(慶応二・七・二十四〜十二・三十一)
- 慶応三丁卯日記(慶応三・一・一〜十二・三十一)
- 明治二年己巳日録(明治二・一・一〜十二・二十四)
- 明治三年庚午日録(明治三・一・一〜十二・十六)
- 明治四年辛未日録(明治四・一・一〜十二・十六)
- 宮本春祇 駒邸警衛日記(安政六・三・十〜十・十六)
- 金子文輔 馬関攘夷従軍筆記(文久三・五・四〜慶応元・九月)
- 伊庭八郎征西日記(元治元・一・十四〜六・二十五)
- 附記：伊庭氏世伝
- 林昌之助戊辰出陣記(慶応三・十一月〜明治元・十一・七)
- 寛王院義親戊辰日記
- 上巻 日記撮要(明治元・一・十二〜五・二十二)
- 中巻 北行日記(明治元・五・十五〜七・三)
- 下巻 北行御用日記(明治元・六・十六〜八・五)
- 寛永寺年行事雜簿(慶応三・十二・二十五〜明治元・閏四・十一)
- 付載：真如院世譜(抜萃)

藤井貞文

〔製作：西澤朱実〕

親族時山清之進ヲ訪ヒ有志黨ニ投スル云々ヲ告ク
 有志黨ノ屯營ハ竹崎町白石正市郎宅ナリ高杉東行統轄ス隊員五六十名
 許ナリ又有志黨ニ來リ投スルモノハ當地歩兵隊員ノミニアラヌ萩又ハ
 徳山長府清末ヨリモ來リ投ス
 白石正市郎一家ノ者有志黨ノ爲ニ奔走シ家族婦女子等ニ至ルマテ朝夕
 酒飯等給事シ太擲重ナリ
 竹崎町ハ清末領ナリ白石正市郎ハ當地ノ巨商ニテ清末藩ニ在テハ士格
 ヲ以テ之ヲ遇スト云フ主人正市郎ハ年齢四十歳許ナルヘシ爲人温厚篤
 實平素勤王ノ志ニ厚ク勤王ノ爲メニ財ヲ散スルモ不尠又椿北堂存在シ
 舍弟二人アリ次弟ヲ廉作ト云フ又筑前平埜次郎薩州西郷吉之助等ト最
 モ親善ナリト云フ又中山公子モ春來該家ニ起居シ給フト聞ク
 六月十日 晴英國ノ軍艦二艘長府灣干珠滿珠兩島ノ間ニ來リ停船シ其舸
 ヲ卸シ近傍ヲ測量ス高杉東行有志黨ヲ率ヒテ前田村ノ海濱ニ出陣ス未

ノ刻頃福原清助長府ヨリ來リ高杉ニ面會シ談話シテ云ク本日長府藩香
 善五六ト同ク英艦ニ抵リ應接スル所アリト又云ク醜夷等直ニ開戦スヘ
 シ云々福原直ニ去ル申ノ刻頃英艦二艘共黒烟ヲ吐テ姫島ノ方向ニ去ル
 則チ竹崎ノ屯所ニ歸ル此日總督ハ胴卷ヲ着ク出陣ス英艦去リタル後チ
 隊員圓陣ニテ兵糧ヲ喫ス總督胴卷ヲ解脫スルヲ見ニ胴卷ノ裏ニ文字ア
 リ余ノ認メタルハ磅磚ノ二字ニテ麻田參政ノ書ナリキ
 六月十一日 晴本日有志黨ヲ奇兵隊ト稱ス總督自ラ筆ヲ揮ヒ門前ノ札ニ
 隊號ヲ書ス

昨夜長府藩香善五六殺害ニ遭フト云フ蓋シ昨日英艦ニ抵リテ我國情ヲ
 漏スルノ故ナリト又香善ト同行ノ福原ハ何ノ故乎昨夜馬關ヲ去レリト
 聞ク

六月十四日 晴奇兵隊加入ノ者追日多人數ナルヲ以テ本日阿彌陀寺ニ移
 轉ス阿彌陀寺玄關ニ隊則ヲ揭示ス云ク不拒來者不追去者犯法者罰爲賊

馬關攘夷從軍筆記

百五十三

馬關攘夷從軍筆記

百五十四

者死十六字ナリ赤根幹之進武人ノ書ナリ

六月十五日 晴夜軍監ノ命ニテ書翰ヲ携ヘテ白石正市郎宅ニ抵リ高杉總
 督ニ呈ス座中久坂義助入江九一及白石正市郎夫妻同廉作アリテ小宴中
 ナリ總督返書ヲ認メ授ク直ニ辭シ去リ歸營ス

奇兵隊移轉後軍伍ヲ編制ス第一伍ハ伍長入江杉藏伍尾田中稔助伍中ハ
 宮城正太郎(後彦八)田村甚之丞(後民助)金子文之進(後文輔)ナリ

頃日當地壇ノ浦ノ砲臺ヲ改造セル爲メ民家ヲ毀チ更ニ一大砲臺ヲ築造
 ス奇兵隊飯田行藏該役ヲ董督ス又隊中ヨリ一伍一人宛助手トシテ日々
 出場ス余モ亦其員ニ加ル

六月廿一日 吉田稔麿京師ヨリ歸リ來リ奇兵隊ニ起居ス
 奇兵隊入隊ノ者倍増加シ分營ヲ隣寺極樂寺ニ設ク

一夕(日ヲ失ス)隊員三五人各硯ヲ持チ來リ墨ヲ磨ス吉田稔丸方九尺許ノ
 白木綿ノ旗ノ如キモノヲ携ヘ來リ墨汁ヲ集メ大筆二三管ヲ束ネ天授丸

ケースの上が少し開けてあり、裏面をこちらに向け
 れば、そのまますぐ中の本を指先で取り出せます。



▼本書(いしんにちじょうさんしゅう)は大正
 十四年に初版第一巻発行。戦後二回復刻されて
 おり、今回の復刻版には初版本を使用します。
 ▼復刻に際しては、東京大学出版会・昭和四十
 四年復刻版に掲載された藤井貞文氏の充実した
 「解題」を転載し、各巻の奥付裏に簡単な「略目次」
 を作成するなど価値を高めました。
 ▼上の「内容見本」はパンフのため詰めすぎて周
 辺の余白は皆無ですが、実物の頁は11%に拡大
 された上記の文字を通常のA5版用紙に印刷し、
 余白十分なのでどうぞご安心願います。
 ▼本書は頁単価11円弱と格安です。でも小社の
 廉価版サービスもこの辺で転換するかもしれま
 せん。お持ちでない方はぜひお求め下さい。
 また「限定二百部」からのスタートなので、予
 約者以外には保証の限りではありません。

■体裁 A5判並製・共箱入 全五巻 約二八〇〇頁

■予約特価 三万円(税・別)

■定価 四万円(税・別)

■予約〆切 26年9月24日

■刊行 26年10月中旬

▼申込ハガキの「セット特価」をどうぞ

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13 マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>

日記を読み重ねる

『維新日乗纂輯』の多種多様性

学習院大学名誉教授 井上 勲

歴史をかえりみようとするとき、その時代に書かれた日記を読むことがある。

幕末維新の激動の時代を生きた人々は、多くの日記を書き遺している。それぞれに激動の匆忙の日々を送りながら日記を書いた、あるいは逆に、激動の時代を生きてきたからこそ、自身を確認するために日々を記録したにちがいない。

『維新日乗纂輯』はその名の通りの叢書である。日乗は日記と同じ意味の言葉である。日記には日録や日誌あるいは日暦、日譜などの類語があつて、日乗もその一つである。だから『維新日乗纂輯』は、幕末維新の時代に書かれた日記を収録した叢書ということになる。

この叢書には目次の通り多種多様な日記がおさめられている。公家、大名から幕臣に至るまで、薩摩、長州、土佐の雄藩と、因幡、久留米ならびに会津、桑名などの幕末維新の変動にふかく関わった藩の藩士もあれば、志士、処士の日記もある。幕末維新の時代に対象を限るならば、これほどに多種多様な日記が収録されている叢書は他にない。

日記を、文学作品としてではなくて歴史をかえりみるための素材として読もうとする場合、そこには次の両様の姿勢があるように思われる。その第一は、いわば事件の証言として読む。第二は、筆記の順序にしたがつて日記を読み重ねながら、その筆者と時代とを感知しようとする姿勢である。

この叢書におさめられている日記の筆者は、濃淡の差はあるものの、いずれも幕末維新の激動に生じた事件に立ち会っている。さらに直接に事件の当事者であった例も少なくない。日記に記載されている内容は、その事件について、またとない証言なのである。

その顕著な例を紹介すれば、伴林光平は天誅組の一員であつて、その日記「南山踏雲録」は大和拳兵について数々の証言がある。禁門の変の前後の緊張の日々は、久坂玄瑞と真木直人の日記がこれを今に伝えている。寺村左膳は土佐藩の重役として慶応三年の京にあつた。薩土盟約が交わされる前後の事情について、左膳の日記には多くのことが書かれている。そして目付妻木頼矩の日記は「戊辰正月七日、大坂城引渡始末」との原題の通りの内容である。

いかに貴重な証言であるとはいいいながら、その限られた部分だけを読むに止めることに

飽きたらないし、日記の筆者に礼を失することにもなり兼ねない。

だから日記を、ひたすらに読む。筆者に寄り添うようにして、日をおつて読み重ねる。天候についての記載があれば、これを読む。何処にいて何をしたのか、旅をしているのであれば、何処から何処へ赴いたのか、そして誰と会い、どのような会話があつたのか、このようなことを読む。事件に立ち会っていれば、それとの関わりの過程と内容を読む。

日記には、しばしば和歌あるいは漢詩が載せられている。有馬新七の『都日記』は和語を多用した擬古文で綴られていて、長歌と反歌からなる長編が載せられている。大鳥圭介の「獄中日記」には、和歌と漢詩とがちりばめられている。和歌にせよ漢詩にせよ、筆者の決意や慷慨や悔恨のさまざまな心裡の表白であるから、史料としての価値などを問わずに読む。

このように日記を読み重ねていくならば、その筆者を通じて、時代の雰囲気と鼓動とを感知することが出来る。しばしば追体験と表現される認識の作用である。幕末維新の激動の歴史は、追体験をともなつてこそ、より深くより豊かに理解される。

本書が復刻されることを喜び、これを手許に日記を読む楽しみの時を待ちたい。